

研究教育活動

## 熊本地震レポート：星槎と学生のボランティアの記録

細田 満和子<sup>1</sup>・草野 紀視子<sup>2</sup>・細田 翠<sup>3</sup>

The Kumamoto Earthquakes of 2016 :  
A Report of Volunteer Activities of SEISA and its Students

HOSODA Miwako<sup>1</sup>・KUSANO Kimiko<sup>2</sup>・HOSODA Midori<sup>3</sup>

キーワード：熊本地震、ボランティア、学生、NPO

### 1. 熊本地震の発生

2016年4月14日21時26分に、熊本地方の深さ約10キロメートルの地点でマグニチュード6.5地震が発生した<sup>1)</sup>。さらに2日後の4月16日1時25分には、マグニチュード7.3の地震が起き、その後も熊本地方は断続的に激しい地震に襲われた。阿蘇や大分県中部などでも最大でマグニチュード4程度の地震が増加し、体を感じる地震は、14日夜から18日までに500回近くに上った。熊本地震は2011年の東日本大震災と同様、多くの被害者を出した。被災地の方々は度重なる余震に怯え、倒壊した住居を後にして避難所で不安な日々を過ごすことになった。

こうした状況の中、星槎大学には熊本在住の学生や大学院生がおり安否が心配されたが、無事が確認された。また、熊本市内の星槎国際高校の連携校の生徒たちも同様、無事という報告があった。星槎グループは、熊本地震に際してもいち早く行動を起こし、東日本大震災への支援を震災直後から継続的に行って得た知見を活かしてきた。本稿では、星槎大学を含む星槎グループの熊本地震への対応、学生の熊本支援のボランティア等について報告を行う。

### 2. 星槎の熊本支援

星槎の熊本支援は、主に3つの点から指摘できる。それらは、①熊本市への寄付、②初期支援と子どもたちの心的支援、③熊本支援ボランティアをする学生への支援である。以下、詳述する。

---

<sup>1</sup> 星槎大学共生科学部

<sup>2</sup> 星槎大学共生科学部 (学生)

<sup>3</sup> 星槎大学共生科学部 (学生)

### ① 熊本市への寄付

地震発生直後から、星槎グループでは、世界子ども財団を中心に、全国に展開する星槎の幼稚園、保育園、中学校、高等学校、大学・大学院、連携校に寄付を呼びかけ、生徒・保護者・教職員などからの志が寄せられた。また、星槎グループがスポーツを通じて支援しているエリトリア国のオリンピック、ヤレド・アスメロン選手からも寄付が届いた。

このようにして集められた寄付金は、熊本県出身で星槎大学特任准教授である末續慎吾氏から、2016年7月1日に熊本市長に手渡しした。

### ② 初期支援と子どもたちの心的支援

初期支援として、本震の2日後に星槎グループ本部職員2名（桑原寿紀、小柳浩二）が広島で物資を調達し、福岡にて情報収集しつつ待機し、3日後に熊本に入った。現地はたいへんな混雑の状況であったが、まずは星槎国際高等学校の連携校である水前寺学園を訪問し、被害状況の把握を行った。次に、つながりのある方々から情報提供を受け、病院、学校、保育園あるいは個人宅等を訪問し、水や物資の提供、破損個所の手当などを行った。

熊本市内は水、食料だけでなくトイレもままならず、また、幹線道路も混雑しているため、福岡を拠点とし、大きな移動はおもに深夜から早朝にかけて行った。4月23日までに、計画した場所はすべて訪問し、準備した物資をすべて配布した。そして食糧等が市内に供給され始めたことを確認して初期支援の任務を終了した。

その後も余震が続く中で、恐怖心が消えない子どもたちにどんな対応をしたらよいのかということは、被災地の課題になっていた。宇城市内の小学校からの要請もあり、保護者や地域の方を対象に、子どもたちの心のケアに関する支援を行うことになった。5月18日に星槎名古屋中学校長で星槎大学特任講師の安部雅昭が「震災後の子どものストレスケア—親としてどんなことをしていけばいいのか—」と題した講演を小学校体育館において実施し、現在に至るまで宇城市の教員の方々と子どもたちの心のケアについて情報交換をしている。

### ③ 熊本支援のボランティアをする学生への支援

2011年の東日本大震災後の経験を活かし、今回も、震災支援ボランティアを行う学生を応援するための特別措置をとることを大学として決め、ホームページや重要連絡等で周知を図った。本学ではボランティア活動に対して単位付与を行っており、活動開始前に「ボランティアの基礎」という科目を取ることが必須条件となっているが、この特別措置によって、その必須条件を満たしていなくても熊本地震ボランティアに限っては単位として認められるようになった。また、特別措置によって熊本地震ボランティアで単位を取る場合は受講料を無料とした。この特別措置は「ボランティアの基礎」の科目担当者である筆者（細田満和子）が発案し、「ボランティア活動Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の科目担当者（渋谷聡、林直樹）が協議し、教務委員会（委員長：鬼頭秀一）に相談し、7月の教授会にて意見聴取をし、学長（井上一）が決定して実施されることになった。

### 3. 星槎大学学生による熊本地震ボランティア活動報告

以上、星槎の組織としての熊本地震支援について述べた。続いて以下は、熊本地震支援のボランティアを行った星槎大学の2人の学生（草野紀視子と細田翠）の活動報告として、本人らによる寄稿を掲載する。

#### 「つながるご縁に感謝して」

草野紀視子（長崎県諫早市在住）

この度の熊本の震災後、初期のころ私はひとりで支援団体に飛び込み支援物資の運搬をしたり、在学している通信制大学の行う心的支援に同行したりしました。また、阿蘇市の復興イベントに参加し、その後、現地調査と今後の支援方法の打ち合わせをしたり、西原村で足湯ボランティアなどをしたりしました。

益城町など、各被災地も回りながら、できるところからの支援を考えていく中で、たくさんの方々のご縁をいただきました。そのご縁から具体的に動き出し、私の活動をみてご賛同いただいた団体の方々のご協力・ご支援により、やがてボランティアバスを走らせることができました。ここではこれまでの活動を報告させていただきます。

◎4月23日：社会福祉法人ながよ光彩会特別養護老人ホームかがやきと医療福祉エンターテイメントの活動を行うNPO法人Ubdobeに協力させていただく形で物資を集め、避難所に行けず物資が届かない南阿蘇方面の老人ホームなどに、物資を運ばせていただきました。惨状を目の当たりにし、生きた心地がしませんでした。

◎5月18日：熊本県宇城市の小学校へ、私が学ぶ通信制大学の学生として心的支援の同行をさせていただきました。恐怖心が消えない子ども達と、その保護者の方の対応方法の講演を補助させていただき、保護者の方との繋がりも持てました。今後、子ども達の心のケアが重要となってくると思います。

◎5月29日：阿蘇市にボランティア活動に行ってきました。単にイベントに参加をしに行ったのではなく、現地の方々のお話を聞き、今後の活動の打ち合わせのためです。こちらの地区は、家の外からの見た目は何ともないように見えますが、家の下に断層が走り、もう住めなくなるとのことでした。

「罹災証明書も土地まではまだ調査が進んでおらず、進んでも家が壊れていないため義援金は期待できない」「それでももう家を壊して仮設住宅に住むしかない」。私はお話を涙ながらにお聞きすることしかできず、頭がぼーっとなってしまうのですが、「話を聞いてもらうだけで楽になった」「周りの人はみんな同じだから口に出せない」と涙ながらにおっしゃってください、吐き出していただくことも大事だなと実感しました。

「地震直後はたけのこを掘りに行って分けて食べた」「冷蔵庫に残っていたものが役に立った」「パンを分けて食べた」と言うお話を聞き、私は泣くのを我慢することができませんでした。しかし、地域の方々の普段からの結束が強く、すぐに皆さんで立ち上がり、



足湯ボランティア。2016年6月25日、西原村の避難所にて

不自由ないように動けたそうです。私から見たら皆さんが家族のように見えました。

- ◎6月7日：西原村にて避難所での足湯ボランティアとボランティアバスの打ち合わせをし、物資が不足している熊本市の地区へ物資の運搬を手伝いに行き、益城町の現状を把握しました。益城町は涙なしではいられませんでした。体育館で諫早市の小学校から送られたエールを表現する作品を見て、嬉しくなりました。
- ◎6月15日：NBC長崎放送「あっぷる」・18日長崎新聞に、私の主催するボランティアバスの参加者募集の記事を取り上げていただきました。メディアに取り上げていただいたことにより、私を信頼し、応募して下さる方が増えました。また、6月18日は西原村にて仮設住宅移転前の家財道具移動の手伝いなどをさせていただきました。
- ◎6月25日：阪神大震災より活動されている被災地NGO協働センターに私の支援活動をご賛同いただき、ご支援の下で西原村へボランティアバスを走らせました。避難所のお世話や清掃・炊き出し・片付け・家の片付けに入りたいお母さんのための子どもさんの預かり・農作業など、各班に分かれての活動をしました。

その中で、避難所の責任者の方に許可を得て、少しでも避難所を撮影させていただきました。紙で仕切られているだけのスペースでの生活、子ども用のプールを大きくしただけのようなお風呂。食事はというと、朝はコンビニのパン、昼はコンビニのおにぎり、夜は出来合いの冷たくなったお弁当。高齢者の方は「パンは食べきれない」と嘆かれていました。それが、土日は炊き出ししてもいいことになっているらしく、「おいしかったー」と喜ばれていたようです。地震後初めて役場の方が休めた日であり、一般のボランティアは受け付けていない日に、少しでもお役に立ててよかったです。

- ◎7月2日：阿蘇市に、ボランティアバスなどについての打ち合わせに行ってきました。また、宮城県仙台市の震災復興支援グループ「きぼう」の浅見健一代表が阿蘇市に入られており、阿蘇市阿蘇消防団に対し、阿蘇の豪雨災害に備えるため救命胴衣10着が贈呈される際の

同行もさせていただきます。

阿蘇市災害ボランティア会議より、ボランティアをしてくださる方へのサービスチケット配布なども計画されています。また、阿蘇市長とも繋がりを持たせていただき、期待をさせていただいております。

◎7月24日：NPO法人まちづくり・ひとづくりネットワークの東京本部理事長と、今後の打ち合わせの為阿蘇市に入りました。

◎8月3日：仮設住宅へ入居される方々向けの物資配布などのボランティアに行ってきました。プロの方のゴスペルコンサートなどもありましたが、私は物資を運んだりテントを組み立てたりという作業をさせていただきました。

こうした活動中、自分の不注意から、私は体中アザだらけになり火傷までしてしまいました。しかし、そんな私が主催する第1便・第2便のボランティアバスに参加していただき、第3便は行けないからと陶器などを持って行ってくれと預けてくださる方や、タオルをご支援くださるボランティア団体の方がいらっしゃいました。そのお心に、とても嬉しい気持ちになりました。

◎8月7日：ボランティアバス第3便を21日に控え、現地との打ち合わせと、ボランティアには行けないけれど……と頂いた物資を運ぶため、阿蘇市に入りました。ここの雄大な自然の中には、壊れかけている山々もあります。こうした風景に囲まれながら、NPO法人まちづくり・ひとづくりネットワークの理事と、協働に関する話し合いをしてきました。阿蘇駅で動いている電車を見て、少しホッとしました。

◎8月14日：今日は、阿蘇の都市復興計画の会議に、NPO法人まちづくり・ひとづくりネットワーク長崎支部長として参加させていただきました。九州理事が発案し、私が原稿作成の補助をさせていただいたものが某機関へ上がっており、専門家の方々による今後の進め方についての話し合いとなりました。その後、現状の把握ということであちこち回り、阿蘇大橋崩落の場所へも行かせていただきました。

◎8月18日：NPO法人まちづくり・ひとづくりネットワーク九州として、熊本市に作ってありました物資用の大型テント解体作業に行ってきました。

21日に阿蘇市に走らせるボランティアバスの打ち合わせも兼ねてでしたが、今回有難いことがありました。

1. ボランティアには参加できませんが、参加される皆さんに飲み物を差し入れさせて下さいとご連絡をいただきました。
2. 今回も第1便・第2便から参加していただいている方やその方が他にお誘い下さった方、私の投稿を見て応募して下さいの方などメディアへの募集依頼なしでも、20名以上の方にお集まりいただきました。
3. 私がこれまでの活動で繋がったある方がいるのですが、ものすごく生きるといふことに前向きな姿勢に、どうしてここまで強くなれるんだろう？ と不思議に思っておりました。そしてある時、話をさせていただきました。

「地震後の避難生活の中で、大切な父が心肺停止となって抱きかかえる腕の中で冷たく硬

くなっていきました。たまたまその場にいた看護師の従兄弟と蘇生させることができ救急車で搬送、現在後遺症がないのかなど通院治療中です。やっとこんなふうには、笑顔でご飯を食べられるところまでできました。家族があるのって、当たり前のようにとても尊いものなのかも。感謝ですね」。

こうおっしゃって家族で食事をされている画像を見せて下さいました。その方が、21日、また一緒に活動したいと阿蘇市に来てくれます。

震災という大変な出来事があり私は映像を見て悲しい涙を流しましたが、少しでも力になりたい思いから繋がったご縁は嬉しい涙となりました。活動は、テレビ、長崎新聞などメディアにも取り上げていただき、県内大学や団体からコーディネートの依頼がくるようになりました。支援の輪を広げるきっかけを県内に作れるようになったことは、参加して下さる方々のお陰と思い、感謝の気持ちを伝えたいと思います。今後も頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

#### 「被災地からの贈り物 (A Gift from Kumamoto)」

細田 翠 (東京都港区在住)

自分にしか出来ない活動を探すという意味で、今回は私にとってもベネフィットの多いボランティアが出来たと思います。熊本震災支援をするにあたっては、6月に都内で開催されたNPO法人RQ災害教育センター<sup>2)</sup>の熊本震災支援報告会に出席し、現地でどのようなボランティアの支援が行われているのか、また、どのようなボランティアが必要とされているのかを学習してきました。そこで、自分自身はボランティアとして、中学や高校生向けの勉強会で得意とする英語を教え、また自分の面倒見が良いというスキルを活用し、夏休みの自然キャンプで子ども達が楽しい時間を過ごせるために貢献したいと思いました。

熊本を訪れる計画を立てている時、ちょうどボランティアをしようとする時期に、震災で最も被害が出た地域に住んでいた子ども達のために無料で提供される子どもキャンプがほぼ毎日実施されていることを知りました。そこで、このキャンプを支援することにしました。

実際にボランティア活動を行ってみると、将来子どもと関わる仕事に就きたいという思いが強化されました。また活動期間中は、「ボランティアをするためにここまで来たんだから出来る限りやり尽くす」というモットーを掲げ、毎日自分のすべてのエネルギーを投入しました。東京に帰った翌日は、1週間の疲れがどっと出て、体中が筋肉痛になっていました。

ボランティア先では、様々な人と出会いました。子どもキャンプでスタッフとして働くために来ていた人たちは、私が想像したこともないようなライフストーリーを持っていました。大学を出ていなくて経済的に負担が大きい、家族と自然の中で時間を過ごし、楽ではないが幸せな人生を送っている話や、過去にあった人生の苦難をどう乗り越えたかという話を聞いたりしました。

また、出会った子ども達からは、大抵の場合年をとるにつれて失われていく「純真さ」また「共感」などという感情を再び学ぶようになりました。ある女の子が川の中で泳いでいた時に、サンダルをなくしてしまいました。その時は大泣きをしていましたが、その後石が多



子どもキャンプのボランティア。2016年8月5日、五ヶ瀬キャンプ場にて

い凸凹している道を歩く時に私は彼女に靴を貸してあげて、自分は裸足で行こうと思っていました。今でもはっきりと覚えています。彼女はとても悲しそうな顔で私を見て、「だけどそうしたら私のせいで翠ちゃんの足が痛くなっちゃうでしょ」と言って、また泣きそうになってしまいました。このように完全に感情移入をするような光景を思い出して、微笑ましいと感じると共に、感傷的でとても感慨深い何かを感じました。我々にとって鈍くなってしまうものを、部分的ではありますが再び取り戻すことができました。よって、ボランティアとして「あげる (give)」という目的で行きましたが、「もらう (gain)」こともたくさんあったと感じます。

私自身は、これまでに学校などを通して何年もボランティア活動をしてきましたが、今回、熊本震災ボランティアをするために、個人でNPO法人に登録して参加しました。このことで、学校の仲間と行うよりも、更に高いモチベーションが湧き上がってくるのを感じました。この経験から私は、周囲の人にボランティアに興味を持ってもらい、実際自らボランティア活動に参加し、その楽しみや意義を感じてもらいたいと思うようになりました。そして、震災支援に限らず、ボランティア活動について、多くの人に知ってほしいという目標を掲げるようになりました。

家族や友達の集まりで活動の話をしたところ、一番多く聞かれた質問は、このような活動をどうやって知ったのかでした。プログラムや設備などが設置されていたとしても、信頼出来るような団体なのかなどの警戒心もあり、なかなか参加したくても行けない場合があります。よって、まずこの経験を活かすためには、周囲に発信することだと思いました。それをするためにフェイスブックが大きな役割を果たしました。最近の若者はSNSを利用して、自分に夢中だ

と思われがちですが、このような場をプラットフォームとして、私が熊本でやった活動を報告することによって、多くの人に震災後のボランティアに興味を持ってもらえたと思います。

私は SNS で日本語と英語の両方で熊本震災のボランティアについて発信しましたが、コメントの中には、「Woah must've been super humbling and fun (すごい、とってもエライし楽しそう)」また「It's a blessing seeing people do something like this (こういうことは素晴らしいですね)」と書いてくれた同年代の友達がありました。熊本地震のボランティアには瓦礫の処理や物を運んだりする力仕事の需要がありますが、それ以外にも震災に影響された人々の心の健康の向上として、私がお手伝いした子どもキャンプなどでもニーズがあることを紹介することが出来、「これだったら私も出来る」と思ってくれた友達もいたと思います。また、SNS を利用することによって参加者側にもボランティアする側にも、このような素晴らしいことをしている団体があるというプロモーションになったと思います。よって、ボランティアをする仲間を増やし、今後も社会に貢献が出来るように、このような活動を続けていきたいと思っています。

#### 4. 熊本震災ボランティアからの学び

以上、学生たちの熊本震災での活動の記録を紹介したが、このボランティアの経験がそれぞれの学生にとって大きな意味を持っていることがうかがえる。筆者自身も、地震後、6月と8月に被災地を訪れ、視察やボランティアをさせていただき、多くの学びがあった。

被災地を訪ねるにあたっては、RQ九州の代表である杉田英治氏に連絡し、情報提供や現地案内をしていただいた。RQ九州とは、東北地方太平洋沖地震後の被災地支援ボランティアから発展して組織化された、一般社団法人 RQ 災害教育センターの下部組織で、熊本県美里町と熊本県と隣接する宮崎県五ヶ瀬町に拠点を持つ。RQ九州では全国からのボランティアを受け入れて、被害が大きい益城町や西原村を中心に活動しており、五ヶ瀬町のキャンプ場のゲストハウスやロッジにボランティアの宿泊場を用意していた。

五ヶ瀬のキャンプ場には、文字通り日本中からボランティアが集まっていた。「東北震災でたくさんの人たちにお世話になったから」と仙台から軽トラックで支援に駆けつけていらっしゃる方、会社がボランティア休暇を出しているという東京の企業の方、夏休みを利用してやってきた神奈川の大学生など、千葉、静岡、京都、高知、愛媛、宮崎など各地から駆けつけてきていた。

こうした方々と共に筆者もボランティア活動をさせていただいた。西原村で半壊したお宅の家財道具を雨風から守るテントの設置をしたり、やはり西原村で家が半壊で住めなくなった独り暮らしのお年寄りの方の庭木の剪定と伐採をしたり、南阿蘇村では土石流で流木が流れ込んでしまった畑で枝や木端を除去する作業をしたりした。そこでは、遠方から来るボランティアと共に、自らが被災しているながらも隣人のためにボランティア活動をされている方々がいて、互いに他者を気遣い支え合う姿が見られた。

本稿を執筆している 2016 年 10 月現在、地震が起こってから約半年経つが、家が傾いてい



たり雨漏りがしたりと住める状態ではなく、いまだに自宅に戻れない方は多数いらっしゃり、山の崩落場所や崩れたお社などもそのままである。行政ができる支援は限られており、家を修理したり片づけたりすることが困難な方々は、復興から取り残されてしまっている。特に高齢者の方々にとって状況は厳しい。

被災者の方々にとっては必要なことであっても、行政ではできないことや、社会福祉協議会のボランティアセンターでは対象とならないことは多い。例えば、半壊・全壊した自宅のがれき撤去や引っ越し、敷地内の崩れた塀の撤去は、「自己責任」という原則から所有者がしなくてはならないので公的機関は関与できず、危険を伴うので社会福祉協議会のボランティアはできない。また、被災された農家の方の農地の草刈り、崩れた畑の整備、収穫などは、営利活動に資することになるとの理由で、やはり公的機関は支援をすることができない。民間ボランティア団体である RQ 九州は、こうした公的機関では対応できない人々のニーズをつかみ取り、支援へとつないでいる。筆者が熊本で参加させていただいた活動もそうした種類のニーズであり、まさしく民間ボランティアだからこそ応えることのできるものであった。

## 5. おわりに

「復興には、まだまだボランティアが必要」と RQ 九州の杉田氏は言う。これは、東北の震災にも当てはまる。地震があつてから5年半が経っているが、特に星槎グループが深くかかわっている福島県相馬地域では、原発事故後の影響やスティグマ（社会的偏見）という問題も重く横たわり、復興再生を妨げている。

星槎グループでは、東北地方太平洋沖地震とそれに続く津波や原子力発電所事故が起きた直後に、相双特命室を設け、その下に教育環境支援班と医療支援班を置き、子どもたちの心のケアや住民の方々の健康相談に取り組んできた。現在、相馬地域は多くの課題に直面しながらも、変化を受け入れつつ復興再生に向けての歩みを着実に進めている。本気で動く沢山の大人たちとの関わりが、子どもたちを PTSD（心的外傷後ストレス障害）から遠ざけて、PTG（心的外傷後成長）へと導く可能性もある<sup>3)</sup>。

熊本でも、他地域からやってくるボランティアを受け入れて協働しつつ、復旧と復興に向けて最大限の努力をされている被災者の方々の姿があった。こうした大人たちの姿を見て、子どもたちはきっと多くのことを学んで成長していくだろう。被災地での声を聴き、その姿を伝える活動を今後も続けていきたい。

## 補注

- 1) 国土交通省 気象庁ホームページ 平成 28 年（2016 年）熊本地震の関連情報。  
[http://www.jma.go.jp/jma/menu/h28\\_kumamoto\\_jishin\\_menu.html](http://www.jma.go.jp/jma/menu/h28_kumamoto_jishin_menu.html) (2016 年 10 月 30 日閲覧)
- 2) 一般社団法人 RQ 災害教育センター <http://rq-center.jp/> (2016 年 10 月 30 日閲覧)
- 3) 次の拙編著を参照されたい。細田満和子・上昌広編著（2014）復興は教育からはじまる—子どもたちの心のケアと共生社会に向けて取り組み、明石書店。